

---

# ポリクリを終えて

---

歯学科5年 吉田 貴大

4年生までの過酷な模型実習を終え、ようやくひと息ついていたところにポリクリ実習は容赦なく始まりました。それは、生身の人間に対して処置を行うという点で、模型実習に比べ遥かに実践形式の実習となっていました。ポリクリでは診療を行う上で必要な知識・技能を一通り学びましたが、その中で最も印象的だったのが伝達麻酔の実習です。麻酔実習はポリクリで行う数少ない侵襲的処置のひとつであり、生身の人間に針を刺す経験などしたことない私にとってその緊張感は他の実習とは一線を画していました。しかし、この経験を経て技能的な面とは別に私は次の3つのことを学びました。1つ目は予習の大切さです。麻酔実習では実習前に麻酔科の先生からの講義があり、そこで手技を事細かに学びました。そのおかげで私は十分なイメージトレーニングを行うことができました。2つ目は常に冷静でいることの大切さです。実習中、急に針が進まなくなることがありました。そんな時、焦らずすぐに先生に報告し助力してもらうことで事態はすぐに解決しました。

3つ目は患者の抱く感情です。当然初めての処置に学生は不安を感じているため、手が震えたり、「ごめん」などと声をかけたりします。これが患者目線だととても心配になるのです。つまり、患者さんの立場で最も不安を感じるのは、術者が不安を感じている時だということがわかりました。このことから、患者さんの前では不安を感じてもそれを態度に出さず、常に堂々としていくことが大切だと学びました。

以上の3つの学びは臨床実習で実際に患者さんと関わっていくにあたって殊更に大切であると実感しています。ポリクリでは他にも様々な学びがあったので、それらを活かして臨床実習に励みつつ、さらに学びを深め、良き歯科医師になるため

の礎にしていきたいです。

歯学科5年 内澤 星七

怒涛のCBT・OSCEを通過し、臨床実習が開始してからあっという間に3か月が経過しました。進級したのがつい最近のことのように感じる一方で、臨床実習が始まって以降、これまでの勉強不足を痛感する場面が多く、実習中に躓くたびに強い後悔を覚えています。中でも、ポリクリの段階でもっと主体的に学んでおくべきだったと強く感じています。

現在の立場から振り返ると、当時はポリクリの重要性を十分に理解できていませんでした。ポリクリでは、症例を想定した治療計画の立案や補綴物の設計、模型を用いた歯内治療、CR充填、支台歯形成、切開・縫合など、各専門診療科にわたる幅広い処置を学びました。また、生徒同士での相互実習として、麻酔や歯周精密検査を行う機会もあり、実際の人を対象とした処置を経験しました。これらは、座学や基礎実習で得た知識を臨床的なレベルへと高め、臨床実習に備えるための重要な実習であったと、今になって実感しています。

しかし当時は、テストや課題に合格することを目的としてしまい、各手技の臨床的意義や実際の診療を想定した思考が不十分でした。現在の臨床実習では、これまでに学んだ基本操作や知識が前提となる場面が多く、その理解や技術の不足を痛感しています。特に、処置の手順を暗記するだけで、なぜその操作が必要なのかを深く理解していなかった点は、大きな反省点です。

また、相互実習を通して患者の立場を体感できる機会があったにもかかわらず、その経験を十分に生かしていなかったことも課題だと感じています。相互実習では処置を行う側だけでなく、受け

る側として不安や緊張、身体的・精神的な負担を実感する機会がありました。本来であれば、この経験を通して患者の立場に立った声かけや説明、疼痛や不安への配慮の重要性をより深く理解すべきでしたが、十分に生かすことができていなかったと反省しています。今後は臨床実習の一つ一つの経験を通して知識と技術を再構築し、将来歯科医師として臨床に携わるための基盤を確かなものにしていきたいと考えています。

### 歯学科5年 大沼 柊太

はじめまして。この度歯学部ニュースを執筆させていただき、歯学科5年の大沼柊太です。歯学部での生活も残り一年近くとなりました。残りの日々も一日一日を大切に、これまでの学びを確かなものにできるよう努力していきたいと思ひます。

5年前期のポリクリでは様々な診療科を周り、その診療科ごとの治療を見学して体験させていただきました。講義や実習を通して学んできた知識や技能が、実際の臨床でどのように活かされているかを実際に見て学習することができました。加えて、先生方が用いているテクニックなども見せていただくことができ、多くの工夫が積み重なって歯科医療が成り立っていることを実感しました。

また、学生同士での相互実習も行いました。相互実習ではクラスメイトとはいえ実際の人に処置を行うため、わずかな操作ミスや配慮不足が相手の不快感や不安につながる可能性があるため、大きな緊張感をもって臨む必要がありました。特に、器具の扱い方や姿勢、声かけ一つひとつに注意を払う難しさを実感しました。また、患者さんの立場を経験することで、説明が不十分な場合の不安や丁寧な声かけが与える安心感を身をもって理解することができました。

現在、臨床実習が始まり先生方のご指導の下、患者さんへ診療を行っています。慣れない診療に苦戦することも多いですが、これまでの実習を振り返りながらより確かな知識をつけられるよう努めています。これからも常に緊張感を持ち、患者さんの立場に立って考えることを忘れずに臨床実習に励みたいと思ひます。



「ポリクリ 班員との写真」筆者は後列右から2番目